

文献紹介

木之内誠・平石淑子・大久保明男・橋本雄一 著
『大連・旅順 歴史ガイドマップ』

大修館書店 2019年4月 201頁, 3,000円+税

本書は、大連・旅順の近代建築の所在について地図とともに解説を加えたものである。大連・旅順の歴史を顧みると、清国領から1898年に帝政ロシアの租借地になり貿易港として発展を遂げる。そこが日露戦争後、ポーツマス条約(1905年)により日本の管理下に置かれ、1945年8月の中ソ友好同盟以降はソ連軍が1955年まで駐留し、中国に返還された歴史を持つ。すなわちこの地を語るには、帝政ロシア時代・日本統治時代・戦後・現在と、少なくとも4つの時代を見る必要がある。さて、本書の構成を示すと、以下の通りである(括弧内は評者による)。

はしがき

地図編

大連市街 17葉

旅順 6葉

金州 1葉

広域図 2葉

解説編

解説

大連・旅順近代史年表

参照・関連資料

コラム(7編)

索引

あとがき

地図編は54頁までで、残りが若干コラムにスペースを割いているものの、4分の3が解説に費やされている。例えば大連駅周辺(大連に詳しい人は勝利橋周辺やダルニー市役所跡など)を含む「中山広場」という図幅は、実に13頁・46項目の解説が付されている。ほか25葉の図幅に付された解説の詳細は省くが、非常に多くの解説をともなっていることがわらう。

地図について凡例に基づき見ていくと、文字注記(地名・歴史的名称・通りの名称など)は、①口

シヤ統治期・②日本統治期・③1945年以降・④現在の名称と、4期の名称が4種の色で峻別され、これにあわせて学校・病院・墓地・宿泊施設などは記号で示し、①～④と同色で表現し設置時期が分かるようにしている。設置年や番地なども色分けした上で並記されているため、実にさまざまな情報が入手可能となっている。建物などの図像表現は、a) 20世紀前半以前の歴史的建築物、b) 20世紀後半の建築物、c) 20世紀末以降の建築物、d) 伝統様式の建築物に分けて表現をし、古い建築物(その多くが名もない)の存在がわかる。

評者が大連の地を訪れたのは2009年3月、2015年9月、2016年8月の3回である。なんの気はなしに写真に収めた古い建築物を、撮影地点の記憶を元に(と、いってもGPSによる行動ログが残っているのと、撮影時に通りの名称が映り込んでいたので再現できた記憶だが)、本書の入手後改めて見てみると、当時の記憶がよみがえりながら得心のいくことが多々ある。解説は、観光地化されている地点のものもあるが、その多くは観光地化されていないような、つまりは日本のガイドブックではほとんど紹介されていないような建物についても「どのような来歴を持つのか」ということがわかる。

例えば観光地化されている事例は図1に示す「旅順日俄監獄旧址博物館」である。ここは安重根が収監・絞首刑に処された刑務所として、知る人ぞ知る場所であり、彼の命日である3月26日に



図1 旅順日俄監獄旧址博物館

(2015年9月15日・天野撮影)

は多くの韓国・朝鮮系の人が集まる場所である。ちなみに、つい最近まで日本人が入場することができなかった場所¹⁾であるという。本書の解説を見ると、「ロシア監獄〔未完成〕→旅順監獄」の項が設けられ、「ロシア帝国統治下の1902年に建設を開始し、未完成のまま日露戦争を迎え」、「日本帝国が建設を引き継ぎ」、名称を関東都督府監獄署旅順監獄→関東庁監獄→関東刑務所→旅順刑務所と変えた。「1945年ソ連軍が旅順に入った後は兵舎として使われ、1955年ソ連の旅順における行政権が中国に返還された後は、解放軍の駐屯地」として利用され、1971年から『旅順日俄監獄旧址博物館』として公開された」ことがわかる。評者が訪れた際にも小学生の校外学習が行われていた。

このような、知名度のある遺物であれば、少し苦勞すれば来歴を知ることは可能である。が、図2はともかく、図3・図4に示すような地域を紹介したものを評者は知らない。

図2は大連駅のすぐ北側・ロシア風情街の裏手に位置している場所で撮影した写真である。2009年当時、舗装もされていない路上にゴミが散乱し、古い建物でもあるため、スラム街の様相を呈していた。当時、<古い建物が残るがゆえに低廉な家賃負担しか出来ない層が居住をしているのだろう>ぐらいに考えていたが、本書の解説部分を見て得心がいった。「団結街、煙台街、勝利路に囲まれた広さ3ha強の」一画は、「28棟の住宅建築のうち、25棟が1901年から1905年のロシア統治期に建てられ、3棟が日露戦争後1910年頃までのものであり、市内でほとんど唯一ロシア時代以

来の来歴をもつ稀少な住宅建築群」であるという。つまりロシア帝国が大連の地を開発した100年以上前の建築物群が残されている様子を偶然とはいえ写真に残していたのである。さらに言えば、この一画には「山田洋次旧居」の文字注記もある。評者は山田洋次監督が旧満州出身であることは知っていたが、せいぜいその知識はく旧満州で終戦を迎えた>というくらいであった。本書によると「映画監督の山田洋次が満鉄職員だった父のもとで少年期を過ごした邸宅が、カフェとして残されている」そうである。このことは3度の訪問時には知らなかった知識である。

一方図3は、日露戦争後に中国人の手によって開発された東関街建築群の一画である。本書によると「日露戦争後、日本当局によって南山麓一帯から追い出された中国人の立ち退き先とされたことに街の歴史がはじまる。『閩関東〔チュアングンドン〕』と呼ばれた山東省などからの出稼ぎ者たちの住む中国人街として発展していった。」場所であるという。南山麓とは高台に位置する高級住宅地として日露戦争後開発されていく場所であり、そこを追い出された人々によって開発されたのが東関街であった。<あった>と過去形で書いたのは、本書によると東関街は2015年末に再開発が始まり、住民の一斉立ち退きが行われたという。「2017年夏現在、建物は青い鉄板で囲い込まれ、街区入口の通りは閉鎖されていた」という。2020年現在、果たしてどんな様子であろうかと確認に行こうと思ったところ、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、中国国内への移動が極めて制限されているのは残念である。



図2 煙台街近代建築群
(2009年3月5日・天野撮影)



図3 東関街建築群
(2009年3月6日・天野撮影)



図4 藍天幼稚園
(2009年3月6日・天野撮影)

ロシア人街(図2)・中国人街(図3)とを示したので、かつて大連の主人であった日本人の居住地についても一例を示す。図4は現在、路面電車の会展中心駅近傍にある(大連の地理に詳しい人には星海広場近傍といった方がわかりやすいと思われる)藍天幼稚園である。ここは日本統治時代<月見ヶ丘>という、高級住宅地で甘粕正彦邸や大連鉄工所社長宅、関東州庁長官官邸が建ち並んでいた。写真の建物は1932年から建っている建物であることが本書に示されている。おそらくは“超”高級住宅として建設された建物を流用して幼稚園として利用しているであろうことが本書と現地を対応させることでわかる。個人的には写真を撮った背中側に薄汚れた食堂があり、そこでコウリャン(高粱)のお粥が供されていたものを食べた。2009年当時2元(約32円)であったと記憶するが、かつての“超”高級住宅地が、今や庶民の(しかも下層に類する庶民の)食事を供するような場所になっていることに感慨深いものを感じた。

感慨深いと言えば旅順である。かつて、旅順は軍港があるゆえに外国人の立ち入りは厳しく規制されていた。評者の初訪問時点では旅順駅のホー

ムにかろうじて行けたと記憶する。これが、いまや大連から地下鉄で行けるようになっていたことを、2020年に大連訪問を計画中に地下鉄の路線図を見ていて気がついた。2015年に旅順を訪問した際には、大連からバスで移動したものだが、地下鉄によって結ばれたことにより気軽に旅順を訪れることが出来るようになった。当然、この路線に乗ることも計画に組みこんでいたのだが、返す返すも新型コロナウイルス感染症の蔓延は残念である。

本書は、2011年度～2013年度科学研究費補助金課題「旧満州地域の都市歴史文化地図シリーズ第一分冊『大連・旅順編』の制作」の成果の一部として刊行されている。<第一分冊>とあるからには、続巻を期待して良いのだろう。と言うのには訳がある。木之内誠編著の「上海歴史ガイドマップ」が1996年に、2011年には「増補改訂版上海歴史ガイドマップ」が同じく大修館書店から出版されている。評者は上海を訪れる際には「増補版」を片手に街をそぞろ歩きして旧態と現況を比較しながら時間をつぶすことをよくしているが、今回大連・旅順でこれが可能になった。さらに他都市でも同じことが出来るのであろうと期待している。当然時間のかかる作業であろうことは承知をしている。上海版が出版され、大連版が出るまでに20年以上の歳月を経過して実現していることを考えると、その作業量たるやであるが、是非実現して欲しいものである。

(天野宏司)

〔注〕

- 1) 小林慶二(文)・福井理文(写真)『観光コースでない満州 瀋陽・長春・ハルビン・大連・旅順』高文研、2005、242頁。同書によると2005年当時「抗日烈士記念館」の名称であった。